研究ノート

音楽活動における非言語的交流

櫻井琴音

（佐賀短期大学　幼児教育学科）

（平成17年12月14日受理）

A Study on Nonverbal Communications in the Music Activities

Kotone SAKURAI

（Department of Infant Education,Saga Junior College）

（Accepted December 14,2005）

Abstract

The music activities in the kindergartens and nursery schools can have a big influence on the development of the children's hearing and seeing abilities, bodily movements and thinking ability. One of the important functions of the music activities is the nonverbal communication. In order to help my students in Saga Junior College to understand the importance of the nonverbal communication, I let them to experience by themselves some communication exercises: making different sounds striking some musical instruments, with or without watching each other, and making various gestures to express themselves.

The students could deepen their understandings about following points:

1. Music activities can have a strong influence on our emotions ;
2. We can exchange our emotions without using words ;
3. Music activities can accelerate the developments of children's various abilities; and
4. Music activities easily make us understand each other sympathetically.

Key words：Music Activity　音楽活動
Nonverbal Communication　非言語的交流

Ⅰ．はじめに

音楽活動は聴覚系の活動であると同時に、視覚、運動、思考などの活動と深く結びついており、統合的な活動としての特徴を持っている。したがって、子どもを対象にして行われる音楽活動は、子どもの聴覚認知系の発達、運動系の発達、対象関係の発達において、特に重要な役割を担っているということになる。このことから、乳幼児の心身の発達にとって、音楽活動は欠かすことのできない重要な活動であるということがいえよう。幼稚園であれ保育所であれ、保育の現場では、日々、様々な音楽活動が行われている。発達促進的なアプローチに音楽活動が導入されるというのは、上記の理由からしても、ごく自然のことであるといえる。

さて、我々人間の交流の発達に目を向けると、言語交流の前段階に、母子間での非言語的交流が存在している。しかも、その大部分は音楽的な交流である。たとえば、喃語に対する母親の応答、或いは子どもの泣き声に対するあやし等がそれにあたる。大人同士の言語による交流と比較すると、母親が発する声の抑揚は明らかに異なっている。子どもに対する応答としての母親の声は、単純ながらも旋律的な抑揚があり、音楽的であるといえる。認知や言語が未発達な段階にある乳幼児は、声、表情、態度、行動といった非言語的交流手段を用いて表現する。したがって、他の職種以上に保育者には、非言語的交流を読み取る技術に加え、保育者自身の意思や感情を伝達するという、非言語的交流手段を身につけておくことが求められる。

そこで筆者は、本学幼児教育学科の学生を対象に、音楽による非言語的交流体験のためのワークショップを実施した。その中で、学生が非言語的交流について考える機会を設け、保育者に求められるコミュニケーション能力育成を目的とした働きかけを試みた。

本研究では、実践内容、及び結果を報告し、この試みの有用性について考察する。

Ⅱ．方　　法

1）時期

平成15年度後期、及び平成16年度後期に、筆者が担当する音楽療法の授業中に実施した。（この科目は、本学幼児教育学科の児童福祉コースの必修科目として、平成15年度から開講している）授業中に、この試みのための時間を設け、5回に分けて授業内容に組み込んだ。

2）対象

平成15年度と16年度の本学幼児教育学科、児童福祉コースに在籍する2年次生、全員を対象とした。人数は、平成15年度が25名、平成16年度が21名、計46名であった。

3）場所

本学の音楽室。グランドピアノ1台、エレクトーン3台、その他、保育現場で使われている楽器一式が設置してある。

4）内容

① 非言語的交流体験をさせることを目的とした音楽活動を実施する。

② その体験の中で得られた各自の気づき、感想を発表させる。

③ 発表内容をもとにディスカッションを重ねることによって、保育者に求められるコミュニケーション能力、及びこれに関する各自の課題について考えさせる。

5）使用した音楽

既存の曲は用いず、全て即興演奏で行った。詳細については後述する。

Ⅲ．音楽活動の概要

音楽活動の中での様々な非言語的交流が、学生にとって分かりやすいかたちで、より頻繁に、且つ容易に得られるようにするため、実践に先立ち次の2点について検討した。

1）どのような音楽を用いるのか

大別すると、既存の曲を用いるのか、それとも即興演奏によるものなのかということになる。音楽の定義について Blacking（1973）は、「音楽は人間によって組織づけられた音響である」と述べている。組織付けの程度を、どの程度として考えるかによって、当然、音楽の捉え方は大きく異なってくる。つまり、ちょっとした音の固まりのような、かなりプリミティブなものから、拍子やテンポ、或いは調性など、かなり構造化されたものまでが音楽であるということになる。

さて、音楽には様々な特性がある。身体運動を誘発させるというのも音楽の特性の一つである。年齢にかかわらず、ふと聞こえてきた音楽に合わせて、いつの間にか手拍子を打ったり、身体を揺らしたりしている姿は、日常生活の中でよく見受けられる。音楽に対するこのような身体反応は、曲に対する馴染みの有無に

関わらず現れる。したがって、既存の曲をベースに用いての即興演奏では、声であれ楽器であれ、当然、その曲のテンポ、メロディー、ハーモニー、歌詞、或いはその曲中の特徴的なリズムなどの影響を多分に受けたものとなる可能性が高まるということが予想される。つまり、学生は肝心な音楽活動における非言語的交流体験に対して注意を向けるというよりも、聞こえてくる曲の音楽的要素の方に気を取られることになりかねない。この理由により、音楽活動の中で、前述した母子間にみられるような非言語的交流を体験させるには、既存の曲を用いることは適さないと判断した。そこで、本研究では即興でのプリミティブな音楽活動を行う中で、実践を試みることにした。

2） 実践上の工夫

即興演奏は、文字通りその場で即時的に演奏することをいう。即興演奏の経験が乏しい学生にとって、自由に演奏して構わないという枠組みでは、逆にやりづらさが募ることになりかねない。戸惑いが強い中で行う音楽活動では、非言語的交流体験も得られにくい。そこで、あらかじめ下記のような枠組みを設定し、事前にこのことを学生に伝えた上で実施することにした。

①ここで行う即興演奏とは、プリミティブな音楽活動を行うことであって、決して曲として構造化されたものを演奏させようとしているのではないということ。

②楽器の選択は、各自に委ねられており、自分がゆとりを持って演奏できる楽器を使用すること。また、演奏する際には、必ずしもそれぞれの楽器本来の奏法にこだわる必要はないということ。

③表現手段は楽器、声、動作の中から選択することとし、その組み合わせは各自の任意とするということ。

④テーマ（嵐、風など）を設定することによって、何を表現しようとするのかを意識して演奏してみること。また、テーマを設定せずに演奏する場合は、その時々に自分の中から浮かんできた音楽を、そのまま演奏して構わないということ。

3）音楽活動内容

演奏する学生の人数によって、下記のような内容に分けて取り組んだ。演奏は各課題ごとに交替で行うこととし、演奏者以外は、演奏している学生の様子を観察させた。

①10人程度の集団で行う活動

・輪になって座り、次に演奏して欲しい人に合図を送り、音をリレーしていく

・メンバーの一人が演奏を開始し、音を出したい人から順に音を重ねていく

②5・6人程度の小集団で行う活動

・約束事を設定せずに行う合奏

・テーマ（嵐、海など）を決めて行う合奏

②2人組で行う活動

・音だけで話し合う

・楽器と楽器、声と声、楽器と声、動作と楽器など、任意の組み合わせで話し合う

⑤個人で行う活動

・楽器を使っての自己表現

・他者の気持ちを感じ取って、それを楽器で表現する

・友人の誰かを音で表現する

Ⅳ. 結　果

ここでは、この活動に取り組むことによって得られた学生の発言を報告する。なお、平成15年度と16年度の学生の発言内容には、特筆すべき相違は見受けられなかった。したがって、今回は年度別の分類は行っていない。また、複数の学生から得られた同じ内容の発言については、一つに集約して掲載する。

1）学生の発言

①音楽に関して

・即興での演奏は、その時、その場で表現しなくてはならないので、一瞬一瞬が必死の思いだった。

・ほんの小さな音の固まりを受け止め、それに答えていくという体験は、自分にとって初めてのことであり、貴重な体験だった。相手がどのような表現をするのか、気を張りつめて聴き取ろうとした。

・音は言葉のように具体的な内容を伝えることはできない。でも、相手が今ここで自分の音を受け止め、音で答えてくれたということは、充分に感じ合うことができた。音でコミュニケーションを取るという、こういう交流もあるということを知ることができた。

・音楽を耳で聞くというよりも、肌で音楽を感じ取ろうとしている自分がいた。

・毎回、今日はどんな交流を体験することができるのか楽しみに参加した。上手くできたかと問われると、そうでもなかったように思う。

・自分なりに音に感情を込めて表現した。その体験を繰り返すうちに、自分が今どのような音を出したいと思っているのかという、音に対する欲求が次第に高まっていくのを感じた。

・音の強弱、長さ、音色、音の質など、一つの楽器でも様々な音が出せる。音の中には、演奏する人の感情が込められているということに気づくことができた。

・音楽が苦手なので、最初の授業の時に「即興で」と

先生に言われたとたん、自分でも情けないほどに萎縮してしまった。必修科目だから履修したけれど、授業についていけるかどうか、一気に不安になってしまった。でも、音楽での色々な体験をするうちに、即興で演奏することが楽しいと感じるようになっていった。

②非言語的交流に関して

・最初は音にばかり気を取られていた。でも、ふと気がつくと、いつの間にか相手の目、顔の表情、しぐさ、身体の動きに注目し、私は必死になって向き合っていた。

・言葉を使わずにコミュニケーションを取るためには、瞬間的にあの手この手で関わろうとする姿勢が必要だと思った。特に、言葉を話す前の段階の子どもと関わるには、このような姿勢が求められると思う。保育者として就職することができた時には、この体験を生かしたい。

・交流は相手の表情をしっかり受け止め、自分も表現することによって、深まっていくということを痛感した。

・相手のちょっとした表現も見逃さないような観察力を身につけなければならないと思った。

・友だちの活動の様子を見ていて、音で話すということは、こういうことをいうのだと、体験して初めて分かった。「あー、音で話している、話している」と思いながら見ていた。音で話しかけ、話しかけられてと、交流が続いている時には、お互いに心から嬉しそうな表情を見せていたのが印象的だった。

・実習先で、子どもが一人で「アーアー」と、声を出しながら膝を叩いているのを見かけた。あの時、それに気づいた私は、気になって仕方がなかった。でも、どのように係わればよいのか分らず、その子どもとちゃんと向き合うことをしなかった。あの時、あの子どもと音で向き合っていれば、と今になって後悔している。

・音のやりとりの中で、相手が自分に寄り添ってくれていることを感じた。その時、自分も寄り添いたいと思った。

・音楽を介して相手を動かすことと、相手に動かされていることの両方を体験することができた。

・みんなの様子を見ていると、顔の表情、しぐさや態度での表現を伴いながら、音でコミュニケーションをとっていた。みんなの目の動きや顔の表情などの表現が、授業の回を追うごとに、豊かになってきていると思った。

・交流を深めていくためには、今すぐに、この場で、相手の表現を受け止めなければならない。そして、その場ですぐに返していくことが大切だと思った。その技術を身につけたい。

・自分の観察力が増してきたような気がしている。

V. 考　察

我々にとって、言語は重要なコミュニケーション手段の一つである。保育者には、子どもの発達水準に応じた分かりやすい言語表現をすることが求められる。それに加え、表情や動作なども同時に使いながら表現するという、いわゆる非言語的交流技術を身につけておくことも求められる。言語的にも非言語的にも、保育者が豊かな表現力を持っているということは、何にもまして子どもの心を動かす。

音楽が非言語的交流手段として使われることは、昔からよく知られている。人間の交流をみると、前にも触れた通り言語交流以前に、母と子どもとの間での非言語的交流が存在している。子どもの泣き声に対するあやし、子どもの微笑みに対する母親の応答、喃語に対する母親の応答、子どもの声の抑揚とそれを模倣する母親の声、などがそれにあたる。このような音楽的対話は、母子の間でしばしば繰り広げられている。保育者には、このような非言語による音楽的対話の技術を身につけておくことが求められる。

音楽を媒体として活用することは、様々な水準での交流を可能にする。たとえば、保育者と子どもが膝を叩き合えば、それは原始的ではあるが交流であるといえる。いくつかの楽器で、交互に即興で話し合うような交流もある。つまり、感覚運動段階の原始的水準から抽象的思考の段階まで、様々な段階の認知機能に対応する音楽活動が準備できるので、音楽活動ではいろいろな発達水準の子どもに対して、発達促進的な働きかけができる。音楽活動における非言語的交流は、子どもの発達を促す上で、きわめて重要な交流であるということがいえる。

本研究での実践は、前述した学生の発言内容から、音楽が情緒的交流手段として、きわめて直接的、即時的であるということの理解を深めるきっかけをもたらすものとして有効であったと考えられる。また、交流技術の未発達な段階の子どもと交流を図る上で、プリミティブな音楽活動は、非常に有効な交流手段と成り得るということの理解を深めるための体験の場をもたらすものであったと考えられる。

学生に対して筆者は、音楽を介した交流体験の中で、感じ取ることの重要性を伝えるとともに、気づきや感想をその時その場で言語化させ、意見交換をする時間を設けた。学生が、今、ここで、何が起き、何を感じ、何を思い、何をどうしたいのかということを考えさせる上で、言語化させるという作業は、不可欠な要素であると思われる。

保育者には、様々な技術を身につけておくことが求められるが、特に、相手のちょっとした表現を見逃さない観察力は、いわば保育者としての感性ともいえるものであり、保育者に求められる技術の中でも、なかなか技術化することが困難な技術である。音楽の特性を活用して行う本研究における実践は、保育者養成校で学ぶ学生に、上記の技術を習得させるうえでも、有用であったと考えられる。

音楽活動における“共感し合う”という共有体験の場は、学生に多くの学びをもたらした。音楽活動を行う時に筆者は、相手の音を聴き、相手の表情や態度を見つめ、それによって感じことを大切にしてほしいと願っている。“感じ取る”ということは、他者との交流を図る上で、最も重要な要素である。そういう人間同士の“感じ合い”が、一番確かな他者への理解の糸口になると思う。

附　記

本研究は、平成17年度全国大学音楽教育学会九州支部学会において発表した。

参考文献

①Blacking,J.：How musical is man? Washington Press、1973.
②宇佐川浩：障害児の発達臨床とその課題、学苑社、1998.
③松井紀和：音楽療法の手引き、牧野出版、1994.
④マリー・シェーファー：サウンド・エデュケーション、
鳥越けい子他訳、春秋社、1996.